

遠くて近い国の友人たち

- 国際耕種の研修フォローアップ事業・パート 2

帰国研修員たちの活動

前号で述べたとおり、これまで当社が JICA 筑波で実施してきた数々の野菜・畑作・陸稲の研修コースの中から、多くの帰国研修員が集積している地域として南部アフリカを選定し、マラウィとザンビアを 7 月に訪問した。当社の研修指導員と頻りにメールなどでの交流があった当該地域の帰国研修員を集中的に訪問したわけである。今号および次号では、紙面のゆるすかぎり、何人かの帰国研修員たちの現在の活動状況を紹介しながら、新たに取り組むべき課題や解決法について探してみたい。

ザンビアでは、帰国研修員が灌漑グループを組織化し、灌漑受益農民に対して野菜栽培を指導していた。彼は研修当時、普及員として来日し南部アフリカ特設野菜畑作コースに参加していた。帰国後、オランダに短期留学を経験したのち、現在は職場で土地利用管理の中堅オフィサーとして後進の指導にあたっているようだ。日本からの研修終了直後から研修指導員との積極的なメールのやりとりを通じ、「種子バンクによる野菜種子の農民への配布プロジェクト」のアイデアなどをわれわれに対して打診していた。そのため、今回のアフリカ訪問では会うことを楽しみにしていた帰国研修員の一人であった。

彼はとあるプロジェクトで建設された中規模ダムを有効活用するために、灌漑グループの組織化と配水計画を策定していた。そして、灌漑技術の導入による安定した野菜づくりを地域農民に対してモデル事業として提示し、日本研修で習得した苗づくりや定植後の野菜栽培技術を駆使しながら、農民の現金収入向上のための技術指導をおこなっていた。今後の課題として、より良質な野菜品種の入手と種子の配布を第一にあげていた。帰国研修員は技術面よりは、資金面での支援を得る可能性を模索しているようであった。

つぎに、ネリカに関する活動を展開している帰国研修員について、このニュースのなかでもシリーズ企画として「アフリカの稲作」を連載している。その中でネリカはひとつの焦点として取りあげられている。アフリカと一口に言っても国によって事情はまったく異なっているだろうが、それは当然として、今回訪問したマラウィやザンビアの現場においてもネリカは大きな潮流として注目を集めつつあるようだった。

マラウィは CARD 対象国にこそなっていないが、伝統的には水稲作がマラウィ湖岸部の周辺の低湿地のディンバ

(湿田)を中心におこなわれてきている。しかし、ディンバも年によっては干ばつの被害をうけることから、帰国研修員の手による育種選抜試験で、乾燥耐性のつよい数種類のネリカを有望な新品種として検討していた。また、帰国研修員と話をしている非常に興味ぶかいと感じたのは、ネリカを畑作の輪作作物の一環として、ディンバとムンダ(畑地)のあいだの未・低利用帯である中間帯の開発作物としてとらえようとしていることであった。

マラウィの主穀はトウモロコシであり、その生産・消費量は断トツに多い。しかし畑作の危険分散の観点から、トウモロコシのモノカルチャーからの脱却、作物多様化が政策課題となっている。こうしたトウモロコシ一辺倒の畑作体系のなかで、新興のネリカはディンバだけでなく、将来的に未・低利用の中間帯においてニッチな地位を占めることが期待されているようだ。この帰国研修員は育種部門の研究者であったが、ネリカ種子の増殖と安定配布が普及にあたっての当面の課題であると言っていた。しかし、未・低利用の中間帯における陸稲の栽培技術、または、陸稲をふくむ輪作体系は確立されていない。その技術を開発していくためには、「輪作体系の確立」や「耕畜連携を軸にした有機物の循環による持続的な畑作技術の確立」などの重要な課題がある。当社としては、ネリカの普及がすすめられる中でこのような畑作技術面での技術開発に協力できるのではないかと考えている。



陸稲コースの帰国研修員。マラウィではネリカ好適品種の育種選抜がすすめられている。

農家グループを組織化し野菜栽培を指導する帰国研修員。



灌漑施設を利用して安定生産した野菜。近くのマーケットに共同出荷をおこなっていた。